

今年は四年に一度のオリンピックイヤー。

遠くロンドンの地で世界の国々や地域から多くの競技者たちが集い、日頃の成果を競い合った。十七日間にわたる熱い戦いはあつという間に過ぎ、四年後のブラジルでの大会が早待ち遠しい。

今大会で日本チームは、史上最多となる三十八個のメダルを獲得した。実力を発揮できた選手、そうでなかった選手、さまざまな思いを胸に帰国したと思うが、結果にかかわらず全員堂々と胸を張ってほしい。

本来オリンピックは、「勝つことではなく参加することにこそ意義がある」と言われ、世界最高のアスリートたちがその技能を競うことに意味があった。メダルというのはその結果としてもたらされるもので、あくまでも

あきらめない心

河本 伸二郎
● 阪南大学理事長

オリンピックの目的は競技をすることであり、メダル獲得ではなかったはずである。

しかし、昨今の大会ではどの国もメダル獲得が至上命題となり、とにかくメダルをとらねば、という風潮になった。こうした風潮が日本選手に「負けてしまつて申し訳ない」と涙ながらに謝罪させることにつながってしまった。勝負は時の運と言われるとおり、試合では何が起こるかわからない。絶対勝てると思われていた選手が早々と敗退してしまうこともあるだろう。しかし、運だけでオリンピックに出場することは難しい。己を厳しく律し、毎日の厳しいトレーニングに耐え、己を越えようと努力し続けたからこそ与えられた結果であると思う。

オリンピックでメダルを獲得することとはすばらしいことで、人々に勇気と感動を与えたことに間違いはないが、たとえ勝てなかったとしても力の限り努力を続ける姿は、それに勝るとも劣ることはないと思う。決してあきらめることなく粘り強く最後までやり遂げる精神力、これが最も美しいものである。

さて、スポーツの世界以外ではどうであろうか。

ゆとり教育を受けて育ってきた最近の学生たちの特徴の一つとして、積極性に欠ける点がある。大学においても講義にはまじめに出席するものの、授業中に携帯電話をいじったり、友人と雑談したり、真剣さに欠ける学生が見受けられる。彼らはあまり深く考える

ことなく、楽をして一定の成果を上げること満足しているように思える。裏返せば、コツコツと努力を続け、最後まであきらめない根気をもった学生が少ないと思われる。

彼らが将来社会に出て仕事に就いたとき、どのような社会人となつてこれからの日本を支えていくのだろうか。組織の中で自らの存在を積極的に主張できるのだろうか。

人生には、これさえやつておけば十分というマニュアルは存在しない。社会が求めているのは、与えられた仕事だけにとどまらず、いろいろな課題を発見し、解決していくチャレンジ精神旺盛で粘り強い人材である。自分の頭で考え積極的にチャレンジし、最後まであきらめない人間である。

そのような人材育成のために、「実学教育」の重要性がますます高まつていく。

以前の大学教育といえば、大教室で教員が一方的に講義するスタイルが一

般的であつた。それは学生にとつては受け身の授業でしかなく、その結果、知識や理論だけを身につけた頭でっかちの学生が育成された。実践の裏づけのない理論ほど頼りないものはない。

いくら大学で理論を学び、理解したつもりでも、実社会では理屈どおりに進まない複雑で困難なさまざまなハードルが待ち受けている。

そこで必要となるのが「実学教育」である。「実学教育」は、理論の構築とその実践に特徴がある。大学（教室）で身につけた知識や技能を現場（社会）に出て活用し、その経験を大学にもち帰り、さらなる研鑽を積み重ねていくことにより、学生は空理・空論ではない、実践の学びが修得できる。机上の学問（教室での授業）と現場（社会）での実践の両立こそ、二十一世紀に活躍する創造力あふれる人材育成が可能にし、社会の発展を牽引する人材をつくりあげるものだと思う。

「実学教育」にはさまざまな壁が立

ちはだかつているが、それを乗り越えることで、粘り強さ、最後まであきらめない精神を身につけることができるのである。

さまざまな分野で活躍し、結果を残すことは、とてもすばらしいことである。しかし、その結果を目指しひたむきな努力を続けることは、その何倍も誇らしいことである。結果だけにとらわれることなく、それに至る過程で、あきらめない心をもって懸命に力を尽くす若者が一人でも多く現れて日本の未来を築いてほしい。

